

# 時衆教團における阿彌陀佛號の意味するもの

大橋俊雄

阿彌陀佛號について織田得能氏は「阿彌とは阿彌陀佛の略語であつて、阿彌陀佛を念ずる人、みづから、この名を付するが爲に又阿彌陀佛號をいふ」(佛敎大辭典)と説明し、望月信亨博士は「淨土宗及び時宗僧侶の法諱の上に加贈する稱號、具に阿彌陀佛號又は阿彌陀佛名と云ふ。文治二年秋、東大寺大勸進俊乘房重源、大原談義の筈に列して法然の説法を聞き、信心肝に銘ぜし餘り、一の志願を起し、我邦の道俗にして死後閻魔王宮に到し名字を問はれん時、佛名を唱へしめん爲に阿彌陀佛名をつくべしとて、自ら南無阿彌陀佛と號せしを起源とす」(佛敎大辭典第一卷)と述べているが、蓋しこれが阿彌陀佛號に對する一般的見解であらう。

ここに示されているが如く、通常阿彌陀佛號は重源にはじまると言はれ、愚管抄には「大方東大寺ノ俊乘房ハ阿彌陀ノ化身ト云コト出キテ、ワガ身ヲバ南無阿彌陀佛ト名ノリテ、萬ノ人ノ上ニ一字ヲキテ、空阿ミダ佛・法アミダ佛ナド云名ヲ付ケルヲ、誠ニヤガテ我名ニシタル尼法師ヲ、カリ。ハテ

ニ法然ガ弟子トテカ、ル事ドモ出タル、誠ニ佛法ノ減相ウタガイナシ」と述べられているが、何故阿彌陀佛號をつけたかについては言及しておらない。阿彌陀佛號は○阿彌陀佛といつて、佛號を法諱の下に付與するのであつて、然阿彌陀佛とか臨阿彌陀佛というのが其れに當るけれども、此の法號は空也が「口に常に彌陀佛を唱えるが故に、阿彌陀聖と號す」とか、教信が「一生の間、彌陀號を稱」したが故に「人呼んで阿彌陀丸と號」したというように、阿彌陀の下に聖とか丸、乃至房とかをつけて呼ばれているのは本質的な異なりがあるように思はれる。即ち阿彌陀聖とか、阿彌陀丸というのは念佛勸進する人にあたえられた尊稱であつて、「人呼んで阿彌陀となし」たというように第三者よりの呼稱であるが、阿彌陀佛號は寧ろ自稱であると考えられる。金井清光氏は文藝史研究の上から「阿彌陀佛や觀世音菩薩を信仰し、佛力にあやかろうとした庶民信仰のあらわれ」が「嶋阿彌陀・無量壽・觀世」という名になつたものではないかと推知しておられる

時衆教團における阿彌陀佛號の意味するもの(大橋)

が、阿彌陀佛を信仰し絶対者と仰いだ僧侶が諱の下に阿彌陀佛號を付するということは、考えようによつては阿彌陀佛をしりにひくことになり、佛を冒瀆するものなほだしいと言はなければならぬ。とすれば阿彌陀佛號を名乗る人の態度としては、かかる意味において阿彌陀佛號を付けたのではなからうと思はれる。

ここで先づ阿彌陀佛號を始稱したという俊乘房重源の宗教的態度について考えてみたい。重源が五輪塔を重視していたことは、曾つて石田尙豐氏の指摘されたところであり、彼は五輪塔を造立するにあたり舍利を納入している。重源が五輪塔を重視し、多數の五輪塔を造立したのは何が故であつたらうか。そもそも五輪塔造立の根柢にあるものは、密教の五輪思想であり、眞言行者が純粹に大日如來と同一たらんとするとき、その想念のプロセスの媒介としての五輪(地水火風空)は、五輪智としての己れの五分身にあてられた。その場合、五輪を積層して具象化したものが「五輪塔」であつた。五輪思想は覺鑊の「五輪九字明祕密釋」に理論化され「キア・カ・ラ・バ・ア」の五輪と、「唵阿密唎多帝際賀羅啤」の九字の阿彌陀眞言の結合からかもしだされる深奥の義理をのべたもので、五輪は大日如來の法身を現わしたものであり、九字は阿彌陀の眞言であつたから、兩者を結びつけることによつて、五輪即九字、大日如來即阿彌陀如來と見ようとするのが、「五

輪九字明祕密釋」に見える思想である。五輪が大日如來の法身であるとするならば、五輪を具象化された五輪塔も大日如來である。換言すれば五輪塔は大日如來そのものであつて、佛格をあたえられたものであつたから、重源は五輪塔中に舍利をおさめ、自から造立した別所には舍利を納入した五輪塔を安置したと思はれる。即ち五輪塔をして生ける大日如來と見ていたのではあるまいか。蓋し重源が五輪塔を造立した意圖は、五輪塔即大日如來と見られた思想のうちにうかがうことができるのであり、彼のこのような態度からするならば、眞言密教では即身成佛で、觀念によつて如來と同等になれるのであるから、阿彌陀眞言をとなえることによつて、其の身は阿彌陀佛となることが出来る。即ち即身成佛して阿彌陀佛となつたからには、自から「阿彌陀佛」と名乗つても一向に差支えない。とすれば重源が「南無阿彌陀佛」と名乗つた所以のものは、その身が阿彌陀佛であるという自覺をいだいていたからであらう。このように考え來つてみると、愚管抄に「阿彌陀ノ化身ト云コト出キテ、ワガ身ヲバ南無阿彌陀佛ト名ノ」つたというのは、重源が「阿彌陀ノ化身」であることを是認していたことを裏付けるもので、化身ということでは重源即阿彌陀佛であることを意味していたのであると思はれる。従つて重源が「南無阿彌陀佛」と名乗ることに、彼自らの思想によるかぎり、何等奇異を感ずることなく、抵抗も

なしに即身成佛の立場からすれば、いたく當然なこととして阿彌陀佛號をつけたものと考えられる。これはあくまで重源の密教思想に發想をもつていたのであつて、このような思想を根據にして法然淨土教においても阿彌陀佛號を用いられたのではないかと見ることは法然淨土教の立場から考えて見る時、阿彌陀佛號の發生を理解することはできない。

法然による阿彌陀佛は西方極樂淨土の教主であつて、その本願力をもつて一切衆生を救つて下さるという報身であり、衆生は彼土往生をとぐべく念佛相續するのである。法然上人が「阿彌陀佛の本願は名號をもて、罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給ひたれば、ただ一向に念佛だにも申せば、佛の來迎は法爾の道理にてうたがひなし」と申しているのは、本願に誓はれた念佛をとなうれば、必らず佛の來迎をうることは必定であることを示めたものであるが、佛と衆生は親子のごとき關係にあつても佛凡一如ではない。法然門下の人々の多くが阿彌陀佛號をもちあわしていないのは、ここに起因するのであつて、たとひ法然教團に屬する人で阿彌陀佛號をもつているとしても、阿彌陀佛號所有者は重源の流れを汲む人であつたと思はれる。眞宗における阿彌陀佛も本願に酬報した眞報身の報身佛であつて、本願成就の覺體そのものであり、阿彌陀佛は極樂淨土にまします。一念發起して淨土に往生せんとねがい、名號をとなうれば阿彌陀佛は救濟を約束される

時衆教團における阿彌陀佛號の意味するもの（大橋）

から、以後の念佛は淨土に往生せんがための口業ではなく、救つて下さる喜びを感謝する念佛となるのである。即ち眞宗においては信をもつて往生の正因となしているものであり、ここに教義の出發點がある。

しかし時宗では、彼土に往生したいという念願をもつてする稱名は、まだ自力の殘存している念佛であるとしている。第十八願他力の念佛は西方欣求の念佛でもなければ、御恩報謝のための念佛でもなく、念佛即法藏菩薩の行であり、阿彌陀如來自身がとなえる念佛であると見るのが、時宗の見解である。一遍は「念佛が念佛を申すなり」といはれている。機を無價値なもの、無力なものとする自覺が強ければ強いほど、法はいよいよ其の光をましてくるものである。そして法に歸したところ、即ち機法一體であつて、最早や信するとか信じないとかいう、主觀的態度ではないのであつて、法即如來のうち自己を見出そうとするところに、自己即阿彌陀佛という自覺が生まれてくるのである。一度び自己のおもんばかりをすてて機法一體の名號に歸したならば、如來に等しいという如來等同の大自然にまで到達し、佛行を行ぜざるを得ない新菩薩として更生するのであり、ここに至つて往生の大事が成就されるのである。一遍が「南無阿彌陀佛と一度正直に歸命せし一念の後には我もあらず。故に心も阿彌陀佛の御言心、身の振舞も阿彌陀佛の御振舞、ことばも阿彌陀佛の御言

葉なれば、生きたる命も阿彌陀佛の御命なり」と申されたのは、機法一體の姿が南無阿彌陀佛であることを示めたものである。「南無とは十方衆生の機なり、阿彌陀とは法なり、佛とは能覺の人なり。六字をしばらく機と法と覺との三に開して、終には三重が一體となるなり。しかれば名號の外に能覺の衆生もなく、所歸の法もなく、能覺の人もなきなり」というているのも、機法一體の哲理を述べたもので、機とは機根の意で人を指し、法とは阿彌陀佛である。

そこで一遍は南無阿彌陀佛の六字をかりに二分し、「南無」と「阿彌陀佛」から成り立つものが、六字の名號であると見られた。その場合「南無」とは衆生の側から「どうぞお救い下さい」と歸命することであり、その聲に應じて「救つてやるぞ」と暖たかい御手をさしのべられるのが「阿彌陀佛」である。機法一體ということからすれば、南無と阿彌陀佛とは生來不二であつて、これを二語として分つべきものではなく、一語として受けとるべきであつて、不二語たるべきところに南無阿彌陀佛の眞意が存するのである。若し敢えて分別するとすれば南無即阿彌陀佛というべきであらう。一遍智眞が「機法不二の名號なれば、南無阿彌陀佛の外に、能歸もなく、又所歸もなきなり」と申されているのも、機即法であることを示めたもので、南無即阿彌陀佛は別して云えば、南無は機であり、機は機根であつて人であるから、人名にあたら

れた法諱と解することができよう。とすれば江州番場蓮華寺の所藏にかかる「六波羅南北過去帳」には俗名の一字をもつて法諱としてゐることは、例せば越前守仲時が時阿彌陀佛とおくり名されたことは、仲時即阿彌陀佛という關係においてであつたと思はれる。仲時という機に阿彌陀佛という法の合一された一如の姿が時阿彌陀佛である。

従つて阿彌陀佛號をつけてゐる僧侶は、生ける阿彌陀如來であり、教團の知識として絶對的權威をもち、阿彌陀佛の代官として、教團内にあつては往生與奪の權さえ附與されてゐたことは、恰かも眞言密教において其の身そのままが大日如來であるとすゝる觀念と異なるところはない。「不往生」というて往生の取り消しをさへなし得た遊行上人他阿彌陀佛の絶對的權威は、恰かも時衆教團において時衆が法諱を上にして下に阿彌陀佛號を付して阿彌陀佛と同格になつたことによつて行い得たことを、時衆教義上から容易に理解し得られるのではあるまいか。

1 金井清光氏稿「中世藝能者の名前について」鳥取大學學藝学部研究報告人文科學一三の二頁參照。

2 石田尙豐氏稿「三角五輪塔」ミュージウム七二の四頁參照。拙稿「時衆教團の成立」日本歴史一六七の七一頁參照。

3 (昭和三十八年度文部省科學研究綜合研究による成果の一部)